

“Heart to Heart”

第6巻 第3号 (No.19)

発行日 平成24年3月3日

心から心へ わかちあう あたたかさ

環境が変化する時期に

武蔵野東教育センター所長 長内博雄

目次:

環境が変化する時期に	1
コラム：出会い(2) 自閉症の良ちゃんとの出会い	2
療育プログラムのようす	2/3
インクルーシブ教育システム構築 という流れの中で(2)	4
ご案内	4

2012年も早や3月に入り、年度の切り替わりの時期を迎えています。保護者の皆さんにとっても、お子さんの幼稚園や学校のことについて気をもんだり、次年度の準備に慌しい思いをする時期ではないでしょうか。担任の先生が変わることは大きな影響があるでしょう。入園・入学や中・高等学校への進学になると、さらに大きな変化になります。入学する学校が子どもに合っているだろうか、本人がうまく慣れてくれるだろうかなどと心配にもなります。また学区制や特別支援学級、通級のことなど、基本的な学校教育のシステムを調べたり、実際に学校を見学し個人的に相談したり、さらには子どもがスムーズ慣れるように、事前に幼稚園や学校までお子さんと足を運ぶ方もいたりするかと思います。

さて、発達障害の子どもたちが新しい環境になじんでいく様子にも苦労が見られます。とくに自閉症児の、変化に対する抵抗感の強いことはよく言われることです。しかし教育の現場から見ると、その障害特性さえも大きく緩和されることが分かります。彼らが環境の変化に順応する力を得ていくことは、日常の中に見られます。考えてみると、抵抗感が強いことには意識が集中しているはずで、彼らはその抵抗感をあちらこちらに持っていますが、逆に本人の苦手なことを受け入れられたときには、普通にはそ

んな些細なことでもと思われるようなことでも、大きな自信を彼らにもたらしめていることが察せられます。そんなときには、本人が生き生きとしていて他の活動にもよく進歩が見られます。この小さな積み重ねが、彼らの弱いところを少しずつ改善させていくこととなります。変えていくという行為に少しずつ慣れ、それらを乗り越えるコツのようなものを会得していくわけです。

ところで、子どもたちの環境が変わることで、彼らのネックになっている思い込みがスッと外れることがあります。環境の変化が教育的チャンスにもなるのです。そのことでよりよい習慣づけをするきっかけもできます。ですから環境が変化せざるを得ないときには、お子さんに前向きな暗示を与えるようにすることが大事です。日常において、環境の変化を積極的に活用して彼らの思い込みを転換させてしまうという発想は、案外有効な手立てになるのです。

教育センターの担当の先生が変わったり、今までと違うプログラムを受講することも、全て彼らの経験を広げるよい刺激になります。どうぞこの時期には、子どもたちに新年度への期待を大きく膨らませてあげて、新しいことに挑んでいく気持ちを育てていただきたいと思います。





コラム 出会い(2)

自閉症の良ちゃんとの出会い

良ちゃんとの出会いは、私の勤めていた小学校に母子が訪れてきた時でした。お母さんに手を引かれた彼は飛び跳ねながら、一方のお母さんはしょんぼりとして、校門に向かって帰ろうとしていました。その姿がさびしそうに見え、声をかけたのがきっかけでした。

この母子は、特殊学級(現、特別支援学級)に入学したいと訪ねてきて、学校側から断られて帰るところでした。何とか入学させてあげたいと校長先生をお願いしたことを憶えています。

結果、いろいろありましたが入学となり、4月に入学してきました。まだ自閉症という障害についてよく知られていない

頃なので、何とかしたいという情熱だけで担当したのです。入学後は、彼が学校にきてから帰るまで、一時も目が離せない状況になりました。

当時は、自閉症の原因は親の育て方といわれていましたので、何回もお母さんと話し合いました。話し合っているうちに、どうもお母さんのせいではないと確信し始めました。

まず、お母さんの「自分の名前くらはい書けるようにしたい」という願いを取り入れて、椅子に座らせるやいなや、さっと立ち上がり、あっという間に外に出ていきました。その度に手を引っぱると噛みつかれ、手や

腕、胸まで青あざになってしまいました。

この時、良ちゃんの指導をどうすべきか、ずいぶん悩みました。ただ、経験的に無理に何かをさせようとせず、彼の好きなことに取り組みせるようにしました。彼の絵はいつも同じ形で、あっという間に1冊の画用紙を使ってしまいました。重い電話帳のページをばらばらとめくり、いつまでも続けていました。このような状況が続いたので、何とかしなくてはと、あせりを覚えました。そこで、ある医師をたずねることにしました。(出会い3につづく)



寺山千代子 (学園アドバイザーボード、星槎大学客員教授)

このコラムは4回シリーズでお届けします。

療育プログラムのようす

ダンス教室 一年間のレッスンの成果を披露する発表会を行いました。たくさんのお客さんに来ていただき、少し緊張した面持ちでしたが、ウォーミングアップの「エアロピクスメドレー」と、生きる楽しさを表現した「青い空を見上げて」を見事に踊りきることができました。はじめの挨拶や音楽を聞いて友だちと動きを合せて踊ることなど、全て自分たちの力で行う経験ができた大きな自信につながったことと思います。(新堂)



お友達と笑顔で！

アート教室 『ローラー版画』を製作しました。まず「はがせるシール」を色々な形に切り、それを台紙に貼ります。その上からローラーを使ってインクを塗り重ねます。最後に全てのシールをはがすと、色々な形に切ったシールの部分から、素敵なインクの色や形が表現できるというものです。インクをローラーで塗る楽しさと、最後にシールをはがした瞬間に色が出てくる不思議さが、製作活動の醍醐味でした。(北川)



ローラー版画の作品

体育教室 足首が硬いと、躓いて怪我をする可能性が高まり、運動する上で敏捷性が低くなると言われています。アキレス腱は一度硬くなってしまうと柔らかくするのが難しくなります。そこで、足首の柔軟性を保つ「カメ」柔軟な足首を為に体育教室で行っているストレッチ「カメ」を紹介します。正座から片足だけ立てた姿勢で、上半身全体で前にゆっくり10秒間ずつ押します。立てた足の踵は床につけて、息を止めないで行うのがポイントです。(鈴木)



「カメ」柔軟な足首を
目指しましょう

音楽教室 1～3年生は、鍵盤ハーモニカと鈴、小太鼓を使用して、「ミッキーマウスマーチ」の合奏練習に取り組んでいます。4～6年生は、ギロを使って「まほうのチャチャチャ」の演奏や3つのパートに分かれて、「カレーができるまで」という言葉のアンサンブルを楽しんでいます。どちらも、「みんなの心を一つに」を合言葉に一年間で養った「リズム感」や「テンポに合わせる」ことを意識しながら、発表会に向けてがんばっています。(高橋)



なべなべそこぬけ

SST教室 友だちと二人組で会話する練習を行っています。いくつか話題を設定して、友だちから話しかけられたらどう答えるか、その答えに対して友だちはどう反応するかということについて、プリントにセリフを書いていきます。プリントにはよく書いていても、実際にロールプレイをしてみるとその通りにいかないことがあります。しかし、ロールプレイを行うことで、具体的なアドバイスを受たり、友だちの会話を参考にしたりすることができるため、とてもよい会話の練習になっています。(大澤)



上手に会話しよう

言語プログラム 1年間で様々な達成がありました。ある子は、最初はうまく言えなかった自分の名前が「～です。」と答えられるようになりました。また、ある子どもは、コップ重ねやビーズ通しなどの手作業を通して大きさや数の概念の理解が深まりました。自分のことばの間違いに気づいてすぐに修正する積極的な姿勢が身についた子どももいます。それぞれの達成感が課題への意欲につながってきているのを感じています。(星)



上手にできるかな？



幼児 厳しい寒さにも負けず、教室は元気な子ども達のパワーで一杯でした。「手袋」(シール、クレヨン)「雪だるま」(はさみ、クレヨン)「雪だるまとこども」(クレヨン、絵の具)などの季節の作品に年齢に合わせた形で取り組みました。そして、3月。「おひなさまかわいいね!」「お内裏様はカッコいい顔にするんだ。」と楽しく製作しています。年度のまとめとなるこの時期、「こんなことができるようになったね。」とその姿に驚かされ、繰り返し取り組んでいくことの大切さを実感します。さあ、これからも大きくはばたいていきましょう。応援しています。(本田)



幼児「おひなさま制作中!」

1年生 算数の時間にお金の学習をしています。硬貨の合計金額を答える練習では、本物そっくりの黒板教材に、子どもたちも興味津々でした。大きな数で学習した位取りの考え方を使って、正確に答えることができるようになりました。国語では、仲間分けの学習をしました。視覚教材を仲間に分けたり、カテゴリー名を聞いて単語を答えたりと、ゲーム感覚で楽しく学習を進めることができました。(新田)



1年 視覚教材で練習

2年生 図工の時間、「友だちの顔」をテーマに模写を行ってきました。最初は描き方がわからず「難しい。」と話していた子ども達ですが、次第に手本を見ながら細かい部分まで描けるようになってきました。モデルになった友だちの顔をじっくり見ることで「目が大きい」「髪の毛が短い」などの特徴に気づくことができ、模写を通して今まで以上に友だちへの意識が高まりました。できあがった絵を見合って「上手だね。」「これ面白い。」などと感想を言い合うのも楽しいようです。(後藤)



2年 似ているかな?

3年生 国語「かるた」の説明文の学習で、「教育センター3年生かるた」を作りました。俳句の五・七・五を基本に、子どもたち一人ひとりが自由に文を考え、その内容に合った絵を描いて着色し、世界に一枚の読み札・取り札を作りました。最後には、スクールプログラム受講中の3年生全員分のかるたを使ってかるた取りを行い、楽しむことができました。遊びの中で、友だちと関わり、友だちのかるたに興味を持つこともできました。(宮川)



3年 世界に1枚のかるた



4年 辺や頂点のかずはいくつ?

4年生 算数の「直方体と立方体」の学習では、子どもたちにわかりやすいように図形の模型を使用しました。平面とちがって、見えないところの辺や頂点、面を考えるのは少し難しいところもありますが、スケルトンの図形だと本来なら見えないところも見えるので理解しやすかったようです。作図の学習では、丁寧に描けるように指導していきたいと思います。(宮下)



5年 挿絵から場面を考えよう

5年生 一年間、物語の学習に取り組みました。物語は、登場人物やあらすじの理解、そして場面ごとに「いつ、どこで、誰が、どうしたのか」の読み取りが基本です。挿絵を見て誰が何をしているのか考えたり、挿絵を説明する文章を完成させたりと、色々な角度から読み深めています。中には、黒板に掲示してあった挿絵を「それ、見せてください!」と言って手元に持ってきて、じっくりと考える子どももいました。これからも色々なお話に触れる中で、本を見たり読んだりすることの楽しさを感じていきましょう。(北川)



6年 1人分の鴨肉は何グラム?

6年生 「なべの国、日本」と題して、全国の鍋や郷土料理について学習しました。その土地の材料や鍋の写真を見てイメージを膨らませ、その由来について知ることができました。レシピからは、作り方や使用する材料を学びました。文章読解に加えて、レシピの材料や分量を聞いてメモに取り、問題に答えたり、4人分の分量から1人分の分量を計算したりしました。「ほうとう、給食にでたよ」「さつまい、さつまいもじゃなくて、鶏肉だったよ」「家でできりたんぼ鍋を作って食べました」など毎回、子ども達から楽しい報告が寄せられました。(高橋)



中学生 大富豪を始めるよ!

中学生 年間を通して取り組んできた「小遣い帳」の集計をエクセルを使ってまとめました。金額や商品名などの入力が入力が速く正確にできるようになりました。また、トランプで「7並べ」「大富豪」を行うことで、友だちとの関わりを深め「ここに出すんだよ。」「どれを出そうかなあ。」など、会話を弾ませながら楽しむことができました。一人ひとりが仲間を意識してまとまりのあるクラスができたと思います。来年度につなげられるように、年間の振り返りを行っていきます。(藤本)



コンピュータ 作成中の新聞

コンピュータ教室 クラスごとに「新聞作り」に取り組んでいます。これまでに習ってきたことを活用して、役割を分担しながら作業を進めています。記事の内容は『コンピュータ教室で習ったこと』で、主にWordを使って作成しています。とてもスムーズに進行しており、これまでタイピングの練習を続けてきた成果を感じることができました。また、ペイントで挿絵を描いたり、インターネットで折り紙の折り方を調べて飾りを作ったりしています。(大澤)



インクルーシブ教育システム構築という流れの中で(2)

副所長 計野 浩一郎

前回は、2006年12月13日第61回国連総会において採択された障害者権利条約(以下「障害者の権利に関する条約」日本政府仮訳)の批准に向けた障害者基本法等の改正の流れを概観しました。今回は、障害者の権利に関する条約からインクルーシブ教育システムを考えてみたいと思います。

この条約は、21世紀では初の国際人権法に基く人権条約であること。「われわれのことを我々抜きで勝手に決めるな」(英語: Nothing about us without us!)というスローガンを掲げた障害者の視点から作られた条約であることに特徴があります。また、障害者が困難に直面するのは「その人に障害があるから」であり、克服するのはその人とその家族の責任だとする「個人モデル」の考え方ではなく、障害は個人ではなく社会にあるといった視点からの「社会モデル」として捉えてることも含まれています。「社会モデル」とは「日常生活又は社会生活において障害者が受ける制限は社会の在り方との関係によって生ずるもの」というものです。つまり、自立や社会参加を妨げている原因を障害者の障害のみに求めるのではなく、社会の在り方との関係でとらえるということです。言い換えれば、「できる」ことを増やすことで自立や社会参加を可能にするだけでなく、「できる」ことが少なくとも自立や社会参加を可能にする教育が必要であるということです。この条約の第24条「教育」でも「障害のある人が成人教育や生涯学習も含めて、

インクルーシブ教育制度の下に良質な教育を受けられる公平な機会を与えられる」というように「社会モデル」としての考え方が色濃くあらわれています。



内閣府の「障がい者制度改革推進会議」がまとめた「障害者制度改革推進のための基本的な方向(第一次意見)」から各関連法案が改正され、インクルーシブ教育システム構築がなされる方向が理念的には打ち出されました。しかし、インクルーシブ教育でも統合と分離が考えられます。障害者各個人にとってどういう教育が一番よいかということ自分を(と家族)で選択したいのではないかと思います。確かに誰もが同じ教育環境で教育を受けることはよいことかもしれないけれども、それを強制されるのは嫌だという意見もありますので、やはり選択の範囲をある程度設けることは大事なことだと思います。例えば、障害児も含め全ての子どもたちは地域の通常学級で学ぶことを原則とし、本人・保護者が希望した場合は特別支援学校・特別支援学級へ就学する。就学決定や就学先での合理的配慮、支援の内容については、本人・保護者、学校、学校設置者の三者の合意を義務づける。このようなシステムが、体制面、財政面も含めた教育制度の在り方として提案され、それに対する議論が深まり、日本の文化や風土に合ったインクルーシブ教育システムができ上がっていくことを願ってやみません。

セミナーのご案内

平成24年度のセミナーの日程が以下のように決まりましたのでご案内いたします。4月より募集を開始いたしますので、お早めにお申し込みください。

- ・平成24年 6月28日(木)10時~12時
「子どもの発達を促す感覚統合」(仮題)
川俣 実(埼玉県立大学 作業療法学科)
- ・平成24年10月 3日(水)10時~12時
「コミュニケーションの発達と支援」(仮題)
藤野 博(東京学芸大学)
- ・平成25年 1月30日(水)10時~12時
「障害者就労支援センターすきっぷの就労支援」(仮題)
上滝彦三郎(世田谷立障害者就労支援センター)

平成24年度療育プログラムについて

若干まだ空きのあるプログラムがございますので、直接当教育センターまでお問い合わせください。

武蔵野東教育センター

〒180-0012 武蔵野市緑町2-1-10

電話 0422-53-8585 FAX 0422-53-8595

Email: education-center@musashino-higashi.org

ホームページもご覧ください

<http://www.musashino-higashi.org>

教育相談・電話相談のご案内

遠方の方々や、来所するのが難しい皆様のために、電話での教育相談も実施しています。相談希望の方は、日時をご予約ください。

心理検査のご案内

WISC-、K-ABC、新版K式発達検査を火曜日・金曜日の午前中に実施しています。ご希望の方は、直接またはお電話でお問い合わせください。